

月刊

いじろのとも

第五卷

十二月号

同行二人

人間は
生まれるときも
死ぬときも
独りぼっちと
思えども
こころの中に
み仏を
宿していると
知るならば
いかなるときも
同行二人

いじろを守れ

このこころ
とても見難く
微妙なり
欲するがまま
動き
おもむく
英知ある
人は
心を守れかし
こころ守れば
安楽もたらず

人生を考え直して

みたい人は 十二

『老子』解説(一一)

今月号は、第四十七章についてみてみたいと思います。

(第四十七章) 家から外に出ないでも、世の中のと(天下)が分かり、窓から外をのぞいて見なくても自然の理法(天道)が分かります。かえって、外へ遠く出かけるほど、いよいよ知ることが少なくなっていくます。

ですから、道の体得者である聖人は、出かけないで知り、見ないで明らかに、為さないで成るのです。

これらの言葉が、具体的なことを言っていると思っただら、理解できません。例によって、大多数の解説書はその点で間違っています。

これは、いつものように、道を体得した人の自らのところの内で感じたこと(自内証)を言っているのです。

現実のことを言っているわけではありません。

この章で言うように、老子とて家から出ないで、世界の中の現実の出来事がすべて分かるわけがありません。

例えば、隣の家の犬が、どんな色の、どんな大きさの、どんな形の子犬を、何匹生んだかさえも、隣の人に聞いてみるまでは、分からないと思います。まして、通信の発達していない、昔のあの広い中国で、あるいは世界で、どこでどんなことが起こっているかを家の中にいて、すべて知るよしなど全くないと言えます。

また、窓から家の外を覗かないで、自然の理法がすべて分かるというのも、現実のことを言っているではありません。老子は、ニュートンの力学も、ダーウインの進化論も、アインシュタインの相対性理論も、いま人類が弄(もてあそ)んでいる原子や遺伝子のも、あるいはその他、近代になつてから確立したどんな自然科学的知識をも、持っていたわけではありません。

なのに、窓から外をのぞいて見なくても自然の理法が分かるとは、どう言うことなのでしょう。普通では理解できません。

そして次の、外へ遠く出かけるほど、いよいよ知ることが少ないとは、まさしく分からないことです。

かつて、ヨーロッパの大航海時代には、船で世界中に

出かけていき、地球が丸いことや、世界には色々な民族が住み、いろいろな異なった生活をしていることを始めて知りました。またダーウィンも、ヨーロッパからマダガスカル島に出かけていき進化論を完成しました。

こうしたことは、ヨーロッパから外の世界に出てかけていったから分かったことで、遠くへ行けば行くほど、色々なことが分かってきたと言えるのです。そして、それが科学と技術を発達させた、近代欧米文化を形成してきたと言えるのです。

なのに老子は、遠くへ出かけて行けば行くほど、知ることが少ないと言っています。それはどんなことを言っているのでしょうか。普通では、よく分かりません。実は、普通で分からないのは、それが、道を体得していた老子の心の中で起こっていること（自内証「じないしょう」を言っているからなのです。ではそれは、どんなことなのでしょう。実は、そのことが、道を体得したこの内容でもあるのです。

説明の都合上、まず、「外へ遠く出かけるほど、いよいよ知ることが少なくなっていく」という点について見てみたいと思います。

これはこれまで何度も述べてきましたソクラテスで言いますと、「自分自身を知ること」からますます遠ざか

ることを言っています。つまり「無知の知」にますます気付けなくなることを言っているのです。

道を知るためには、自分の無知に気付かなければなりません。自分が、かつての、いや今の欧米文化が目指すように、遠くへ出かけて知ることが、人間の「適応」可能性を伸ばし、それが人間として価値が高いことであると考えるような立場からは、「無知の知」からますます遠ざかっていると断言するのです。

ですから、ここで言う「知」は仏教で言えば仏の「智慧」であって、決して「知識」ではないのです。人間は幾ら知識をもつていても、幸せになることはありません。逆に、知識を持てば持つほど自分は知ったという執らわれをもち幸せから遠ざかっていきます。大学の先生を見ていればその哀れさは、見るに忍びません。知ったことで、何々賞といったものを貰って表彰されたり、自分が書いたものが売れたり、管理職にいたり、講演に行つてちやほやされたりしますと、ますますその執らわれは増長されて行きます。自分への執らわれを捨てなければ智慧は得られないのに哀れにも、ますます執らわれを増やして行くわけです。その結果、自分が偉くもないのに、逆に偉いと勘違いしてしまうのです。真に偉い者は、逆に自分への執らわれを捨てて、道を体得した人なのです。

このように、知識を得るのではなくて、自分自身を捨てて自分を知る、つまり仏の智慧を得るためには、自分自身の外を幾ら探しても見つかりません。それはどこまでも自分自身の心の中にあるものだからです。自分の家や窓の外ではなくて、ひたすら自分の心の中を覗かなければならないのです。そこにこそ、全ての事を、世の中（人的環境）も、自然の理法（物理的環境）をも知る根源があるのです。

その根源に行き着いたとき、私のモデルで言いますと無意識の「生命蔵」と「如来蔵」の統合にたどり着くとき、世の中も自然の理法も全て分かるのです。

では、世の中を知り、自然の理法を知ることが、世の中の具体的な事件であったり、自然の法則であったりしないのに、世の中を知り、自然の理法を知るとは、どんなことなのでしょう。

このことが、なかなか普通では理解できません。以下は、私なりの一つの解釈です。

まず、世の中ですが、それは人間の営みのことだと考えられます。人間関係が作りだす、人的環境のことだと思ふのです。だとしますと、具体的事実ではないのに、そうしたことがみな分かるとは、その原理が分かるということでなければなりません。人間関係のあり方の原理

が分かることだと思ふのです。

ところで、知識を得る科学では、そういう原理を見つけるのは、社会学や人類学だということになります。しかし、これまで見てきましたように、そうして得られた原理は、科学的知識ですから人間の外にあるものです。ですから、そんなものをいくら研究しても、人間関係のあり方を体得することはできないのです。自分の中で自分が生きることとその知識とを統合することはできないのです。

私が、人間の精神モデルで、「自己」の他に自分の中に「他己」と言う他者を表す「己」を持ち出す理由がここにあります。それは、無意識では「如来蔵」ですが、その、自分の中に蔵した絶対他者である如来が自己に統合されるとき、宇宙と自己とが一体であると実感でき、人とのあらゆる関係の原理が体得できるのです。またそれは、同時に人間のあり方の原理でもあるのです。そうなりますと世の中の具体的なことは何も知らなくても、全てを知ったと実感できるのです。

傲慢のようですが、哲学書や宗教書のような人間のあり方について書いてある本も、読まずして分かるのです。別に読んで知りたいという気があまり起こらないのです。たとえ読んでみても、自分の基本的な考え方を変え

なければならぬようなものには出会いません。自分の考え方を具体化したり、人に分かってもらうためにそれを批判しながら自分の考えを述べるために利用することはありますが、自分の考えを超えたものに出会わないのです。ということは、いわば世の中の全てを知ったことになっているのです。

こうした、道を体得した地点から学問を始めますと、大きな間違いを犯さなくてもよいのですが、しかし、現実にはそうではありません。例えば、かつて、人の経済的な関わり方を研究する経済学が、マルクスによつて科学的（哲学的）知識として打ち立てられるや、その知識に基づいて方々で流血の共産革命が行われ、その主義の下に、多くの人権が無視され、多くの人命が奪われて来ました。それは、人類にとつてとても不幸なことだったと思います。

この例は、知識が自他統合に役立たない証拠の一つだと言えます。でも、これは何も、科学だけではありません。哲学も宗教も、それが知識として理解されるとき、同じように人に余計に執らわれを増やすだけになります。ですからその知識に基づいて行動すれば、いくらでも過ちを犯してしまうのです。先月号の第四十一章にもありましたように、人類が、小賢しく環境に適応し進化

して、進んでいる積もりが、悲しいかな、滅亡へと退いているのです。科学はそんなものなのです。

それは、次の自然の理法についても言えることです。道を体得しますと、自然の理法の全てを知つたと実感できるのです。それは、自分への執らわれを完全に捨てるということと同じことを言っているのです。

現代人は「自己」に執らわれて、自然を自分（＝人間）の自由にまかせて享受すればよい、と考えているようですが、まさしくそれは、科学的知識に基づいた発想なのです。病気は、医学で人の臓器を移植したり、遺伝子までも操作して克服し、それによつて人間の長生きする自由を大きくする。生活は、科学技術でいろいろ便利にすること、人間の生活上の自由の度を大きくしていく。食料も科学技術で生産し、多くの人口が豊かに、自由に生活できるようにする。しかし、それは、自分への執らわれをかえつて増やしているのです。ますます幸せを減らしていつているのです。

道を体得して、自己への執らわれを捨てた境地に至れば、自然は、あるがままにあるだけなのです。自然随順という言葉がありますが、その通りなのです。そうなりますと、老子の言うように、自然の全てを知っていることと同じだと言えるのです。自然の理法のあらゆること

を受入れ、それに従い、それに感動することができるようになるのです。

最後の部分に進みます。聖人は出かけないで知り、見ないで明らかになり、為さないで成るといふ部分です。

これまでの記述から明らかのように、聖人は外に出かけないで知り、外を見ないで知りますが、それは「明らかになることであり、為さないで成ることであると言えるのです。

この明は、これまで既に、何回か出てきました。それは、七月号の第十六章、十月号の第三十三章でした。結局、それは、自分の中の無意識にある「生命蔵」と「如来蔵」を統合することでした。ここで言っていることも、当然、同じことなのです。

残りの、為さないで成る（不為而成）、という部分ですが、これは、老子を一口で表すときよく使われる、無為自然に通じています。為すこと無く、自ら然るのです。自分の外を知ろうとはからわないから、何もしないで、自ずと成っていくのです。成るとは、弘法大師さんで言え、即身成仏ということになります。

難しくドイツの哲学者ヘーゲルに即して言いますと、自分が生き延びようとする生命蔵とそこから迷い出るとき否定的に働きかけてくる如来蔵という、有と無の矛盾

を含んで、人間は成らざるを得ないので。そうして、成って成って、遂に成り至るところが、成仏なのです。それは自らをはからうことなく、仏さまに抱かれてただあるがままにある世界であり、超越者に全てをおまかせして生きる世界なのです。

この、第四十七章も極めて深い真理を述べています。あらためて感動しました。

自作詩短歌等選

怠りなまけて

怠りて	さらにまた	足はやき
なまけし人の	眠りし人の	馬がおそきを
中にあり	中にあり	抜き去りて
一人つとめて	一人めざめて	ひとり先頭
励みし人は	思慮ある人は	駆けるがごとし

すける空と雲

すける空

秋の夕暮れ

雲まっか

宇宙の果てに

すける空

雲まっか

偉い人・だめな人

自分は偉いと

思つて

間違いを

重ねる人

自分はだめだと

思つても

何も

しない人

自分はだめだと

思つて

修行を

重ねる人

すばらしき日本語

十六歳で

日本に来て

日本語で

小説を書いている

リービ・英夫氏は

言う

日本語ほど

すばらしい言葉はない

ヨーロッパ語では

よい方だと思える

フランス語よりも

ずっとよい

と

最近

私も

日本語ほど

よくできている

言葉はない

と思つていたので

こんな外国人がいて

印象に残つた

コスモス

そここの

土手や空き地の

コスモスが

美しかりき

秋の盛りは

旬の野花

野を飾る

数ある花の

その中で

春は菜の花

秋はコスモス

人生は一方通行

人生は

一方通行

ただ

進むだけ

ひたすら

死に

向かつて

自作随筆選

大伴旅人の妻への挽歌

十一月十三日（日）のNHK教育テレビ「こころの時代」は、「万葉人の死生観」と題する有本忠雄アナウンサーの犬養孝氏へのインタビュアーでした。

犬養孝氏は、大阪大学名誉教授で現在八十七歳だということでしたが、とても若く見えました。それは、見かけだけのことではなく、話を聞いていても、とても情動的、感動的で、心の若さを感じました。

特に、大阪大学の総長だった方の葬儀の話をするときや、大伴旅人の亡き妻を詠む歌を紹介するときなどは、涙声でした。その情動が、こちらに伝わってきました。番組で紹介された、印象に残った大伴旅人の妻の挽歌は、次のようなものでした。あらためて万葉集の魅力を感しました。

世の中は 空しきものと 知る時し

いよよますます 悲しかりけり

吾妹子が 見し鞆の浦の むろの木は

常世にあれど 見し人そなき

人もなき 空しき家は 草枕

旅にまさりて 苦しかりけり

吾妹子が 植えし梅の木 見るごとに

心むせつつ 涙し流る

なお、大伴旅人の歌を、小学館刊の日本古典文学全集「万葉集」で探していて、いつも正確に思い出せなかった、山上憶良の子を詠んだ歌を見つけました。

銀も 金も玉も 何せむに

優れる宝 子にしかめやも

釈尊のことば（三）

法句経解説

第九章 悪

（一一六）善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。
善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ。

天台宗や真言宗、その他の宗派で皆さんがお使いにな

る、日々のお勤めの次第書、「在家勤行式」の中には、十善戒というのがあります。それは、毎日それを唱えることによつて、悪を退け、善をなさんとつとめるためのものです。それらは、次の十ヶ条から成っています。

不殺生、不偷盜、不邪淫、不盲語、不綺語、不惡口、不兩舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見です。

は「からだ」でなす悪、は「あたま」でなす悪、以後は「こころ」でなす悪を戒めるものです。

から のからだでなす悪は、昔は殆どが刑事犯でした。しかし、今は の不邪淫戒はそうではなくなっています。でも、神はいま、現代人のフリーセックスへの墮落をたしなめるために、エイズをこの世に贈られています。セックスを楽しんでも、人間は救われません。かえつて、性への渴きを助長するだけです。そのことは、なにも、性についてだけ言えるではありません。食も、人より優りたい心も、同様なのです。人間は、貪欲になるほど、それへの渴きを感じるものです。諺に言いますように、金持ちほどお金に汚い、というのは当たらずとも遠からずなのです。

私は、人間の基本的な欲望には三種類あると言っています。それらは、食欲、性欲、優越欲です。それを戒めるのが、前述のように、 の不慳貪戒なのです。

そして、食欲（物欲）に対応しておこる行為を戒める戒律が、 の不偷盜戒であり、性欲に対応しておこる行為を戒めるのが、いま見ましたように、 の不邪淫戒であり、優越欲に対応しておこる行為を戒めるのが、 の不邪淫戒なのです。

貪ることは、厳に慎みたいと思います。

次に、 から までの四つの戒律は、口、つまり言葉（認知・言語・あたま）で犯す過ちを戒めるものです。個人が尊重される社会では、自分を主張することが大切になります。するとどうしてもしゃべることが多くなります。ですから、現代人はとても饒舌になっています。饒舌になりますとどうしても、口で過ちを犯してしまいます。大学の先生はしゃべることが商売ですから、大学ではこの戒律は全く守られていません。悲しむべき状態にあります。

他人のことをしゃべることは、特に、差し控えたいものです。

最後に、ここで犯す悪を戒める戒律ですが の不慳貪戒については、既に見た通りです。次の 不瞋恚戒ですが、これは他者に対するところのあり方を戒めるものです。自分が腹が立ったとき、他者に当たらないように戒めるものです。

腹が立つ原因には、様々なものがあります。一番、我慢するのが難しいのは、他者から馬鹿にされることです。それも自分よりも下だと思える人から馬鹿にされるときです。次に、一般的に言えることは、物事が自分の思う通りに行かないときです。更に、自分の気分がすぐれない時、例えばお腹が空いている、二日酔いである、病気になる、眠い、といった時です。

この戒律は、こうした時でも、他者には笑顔で対応できなければならぬと戒めています。残ったの不邪見戒ですが、この戒律が、一番難しい戒律です。誤った見解をいだかないように戒めるわけですが、この誤った見解とは何なのかが、難しいのです。

私は、これは無意識にある「生命蔵」と「如来蔵」との統合が取れるよう、努力を怠らないことを戒めたものだと思っております。

人間は、自分の生きる力（生命蔵）を確かにすればするほど、自分を超えた力〓自分を否定する力〓自分を生かす力（如来蔵）に気づかなければならないのです。

ところが、多くの人は、自分の生きる力〓生きる可能性が高まれば高まるほど、自分への執らわれを強めて、ここでいう邪見をもつようになるのです。そして、自分が邪見を持っていることにすら気づかなくなっていくの

です。ですから、自分ではよいことをしている積もりで、悪いことをしているのです。しかし、それに気づくことすらできないのです。人間の背負う宿業と言わなければなりません。

そして、その結果、他のあらゆる戒律を犯すようになるのです。

ですから、この偈に言いますように、善をなすのを急がなければ、ここは悪事をたのしむのです。自分が生き延びる可能性を伸ばすことは、伸びれば伸びるほど、楽しいことだと言えます。だから、楽しんで自分では気づかずに悪事をなしているのです。

では、それを避けるにはどうしたらよいのでしょうか。ここが人生では一番大切な点です。それは、既に見ましたように、意識の統制の届かない、潜在意識ないし無意識の統合をはかることなのです。「生命蔵」と「如来蔵」との統合をはかることなのです。

そのためには「あたま」と「からだ」と「こころ」を総合的に使って、修行しなければなりません。具体的にはいつも書きますように、ヨーガであり、修法（しゅほう）〓真言密教のお祈り）であり、坐禅であり、読経であり、瞑想なのです。

ひたすらそうしているとき、無意識の中の統合がもた

らされてくるのです。ヨーガの言葉で言いますと、クンダリニーがシユスムナーを通過して駆け上がる時がくるのです。真言密教で言いますと、仏さまと自分が一体である実感できるのです。自分が宇宙の根源である実感できるのです。つまり、即身成仏を体験できるのです。坐禅でいいいますと、これが大悟であると実感できるのです。

「善をなすのを急がなければ、こころは悪事をたのしむ」と、この偈で言っていることは、結局は、ここに行き着かなければならないように思ふのです。人間で一番悲しいのは、自分が過ちや悪事を重ねていても、それに気づけないことです。自分に執らわれていて、自分では悪いことをしているという意識がなく、悪いことをしていることです。

仏教では、それに気づいてそこから救われようと決心することを発心と呼んでいます。発心して、仏を信じ、法を信じ、執らわれからの救いを信じて、ひたすら修行に励むとき、既に、その人は無限に自己完成の近くにいるのです。

読者とのエコーコミュニケーション

お便り

健康のもと（一〇）故泉重千代氏の一一九歳は世界一の長寿であった。しかし、平安の初期にも一〇一歳、一一九歳の重臣もあつた。これらは今様の時代なら、ゆうに一二〇〜一三〇歳の値打ちがある。

日本の法律の始まりは大宝律令であるが、その次に養老律令が制定された。その施行細則である政治要略には、枸杞（くこ）を飲めば健康になると記されている。その文章は、漢文であるが、ここでは和訳して、三人のみ記す。

「長寿の秘伝薬を用いて老化をとどめた記事」 枸杞で
一〇一歳

竹田千継は、京都愛宕郡の人で、一七歳で典薬寮（医薬局）に入って医者になった。本草書を読み、枸杞の項に感銘して全文を暗記した。これを実地に試すために畑に二反を買い、枸杞を植えて春夏は葉を、秋冬は茎根を採り、お茶、枸杞酒、枸杞風呂に用いた。ところが、七〇歳になっても少年のように若く、髪は黒く、皮膚には光沢があり、耳目も達者で虫歯の一つもない。「本年九七

歳です」と文徳天皇の問いに答えたので、天皇は驚いて侍臣に命じて驗視させたが間違いはなかった。天皇は感服して即時に典藥寮の高官に任命した。そこで藥草園を管理させ、大量の枸杞を植えさせた。千繼は学識が高くよく天皇の御意になうとところが、その後左馬寮と宮内の高官をも兼ねた。ところが千繼は極めて多忙になり、食事の間もなくなくなった。そして二年足らずの間に白髪になり、しわ面になり、腰は曲がりつえを必要とした。千繼はついに一〇一歳で死んだ。私はこの事を先の天皇より聞いていたが、文徳天皇の近臣者の語るところと全く一致する。よってこの事を後世のために記録しておく。

枸杞で一八九歳

春海貞吉は寛平年間の人で、宮廷の奏樂や舞の師匠で爵位があつた。筆者が四五歳で白髪になり衰弱した時、貞吉は大変心配して「なぜ枸杞を服まないか？ だからそんなに老化するのだ」と言った。私は、枸杞の効果は聞いているが使い方を知らなかった。貞吉が言うには、大同元年皇室の舞の師匠になり、二六歳の時に医者に勧められて一町歩の畑にクコを栽培し煮て飲みまたクコ風呂に入つた。今年一一六歳である」と。なお少年の顔つきで養生法を説明してくれた。その後貞吉は寛平九年に伝染病患者の親しい家を見舞いに訪ね、感染して急死した。

時に一一九歳であつた。(阿南市・片田一郎) 短歌

イタドリの 花の盛りを 眼に溜めて

明日よりの 我が養いとせむ

聾の眼は 小さき花も 見出すと

鳥の声聴く 友はよろこぶ

何程の ことにもあらぬ 人間の

聾を充たして 溢るる緑

(東京都・高木由紀子) 俳句

クリスマス サンタ待つ子は居なくなり

忘年会共呑みすぎて肩をかり

手袋を買って使わぬ年の瀬や

(徳島県・小原白峰) 浮寝鳥

一羽の鳥に動かされ

石垣の野武士の星や姫椿

風吹けば香り包みし枇杷の花

(徳島県・須藤一樹)

後記

一、今年は、ユニオンプレスさんのご好意で、きれいな印刷本で本誌を発行して参りました。しかし、値段が高かったせいもあるのでしょうか、発行部数も伸びず、皆さんに高額な負担をして頂いたにもかかわらず、かなりのお布施になってしまいました。形式だけのことでもつたいたいと思いませんので、残念なのですがまた、来年からは元のコピー本に戻させて頂きます。購読料は、郵送料や封筒代として年間千円にさせて頂きたいと思いません。これまでお振り込み頂いた購読料は、月割りで先送りさせて頂きます。

二、お世話になりましたユニオンプレス社長の池田肇さんから次のお便りを頂きました。紹介させて頂きます。

一年間『こころのとも』の制作をお手伝いさせて頂いていただきましてありがとうございます。「人の心」を活字にする重要さを新たに学びました。「人にお役に立つ本作り」を、私のライフワークとする決心が着きました。それにしても、限りある資源なのに、無駄で有害な本が多いこと、いま反省しなければいけない時期だと思いません。『こころのとも』のご発展を願っています。

三、池田さん、一年間でしたが、本の構成・印刷ありがとうございました。

四、今年一年は、私にとりまして激動の一年でした。でも詳しくは、書けないことばかりでした。よいことは、本が二冊出版できたことです。よいお年を。

月刊 こころのとも 第五卷 十二月号 (通巻 六十号)	平成六年十二月八日 (発行人) 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small> (制作) ユニオンプレス (発行所) ひびきのさと エコーミュニケーション研究所 〒771 43 徳島県勝浦郡勝浦町星谷 星の岩屋
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	